

# 巻頭言



総合科学部長  
佐藤 正樹先生

今日までもっとも長くわたくしの伴侶であったものの一つがゲーテである。高校一年のころはじめて読んで以来のつきあいが、今も続いている。

名古屋駅近くの百貨店の書籍売り場に人文書院版の『ゲーテ全集』十二巻が並んでいたのを、わずかな小遣いをためて順々に買うのが楽しみだった。わたくし以外にそれを求める人はなかったとみえて、最後の一卷を買い終えるまでだれにも邪魔されなかったのであるから、それは人知れず熱を帯びて続く逢瀬のようなものであった。

わたくしはゲーテに何度も勇気を与えられた。たとえばカルル・フリードリヒ・フォン・ラインハルトといえは、フランスの外交官として活躍したドイツ人で、フランス革命を内側からつぶさに観察し、その世

界史的意義をシラーにくわしく書き送った人物として知られる。一時期ロシアに抑留されたこともあるが、ふとしたきっかけから晩年のゲーテとのあいだに文通が始まった。これはゲーテの往復書簡のなかでも、包み隠しのない意見交換がみえる点にきわだった特色のある逸品であるが、一八一二年のある手紙に、ゲーテはこんな文章をしたためている。

Die Welt ist größer und kleiner als man denkt. [...] Wer sich bewegt berührt die Welt und wer rührt, den immer bereit seyn zu berühren, oder berührt zu werden.

綴りと句読法は原文のままである。「世界はひとが考えているよりも大きくもあり小さくもある。」「……」動くひとは世界に触れる、動かぬひとは世界が触れる。だから、触れるか触れられるかするときのために、つねに準備を怠つてはならぬ」という意味である。

今は多少のゆとりさえあれば気軽に海外へ出かけられる時代になった。また、だれしも自己アピールに余念がなく、中年の教師さえ年甲斐もなく自己アピールに汗を流している。だから、「動くひとは世界に触れる」というのはあたりまえの時代なのかも

しれない。いや、自己アピールに努め、「動く」ことがしきりに推奨される時代となった。

しかし、動きたくても事情がそれを許さぬ場合もある。内気な性格から、人目につくことを苦手とする者もあるだろう。だが、たとい動かなくても、世界がそのひとに触れてくるとゲーテは言う。ただし、動いて世界に打って出るにしても、世界がそのひとに注目して触れてくれるにしろ、そのためには、またそのときのために、日くるからその準備を整えておかねばならないといっているのである。

このことはがなぜわたくしを鼓舞し救ってくれたか、そこまでは書かない。が、しばしば焦燥感と無力感とにさいなまれながら、わたくしを職場に踏みとどまらせた力の一つがこの文章であったことはまちがいない。

この文章は二つのことを考えさせる。

一つは、世界のどこへ出かけても、それが世界に触れることを意味するとはかぎらないということである。異なる世界、異なるものを受けいれる度量を養わなければ、世界に触れることにはなるまい。さらにいえば、これは遙かな異国において当てはまるだけでなく、ごく身近な生活圏においても同様であって、「世界」を「世間」や

「職場」や「学校」に置きかえてみても、その準備が必要だという事態は少しもかわらないのである。

もう一つは、「触れられるための準備」に要する多大な忍耐、堅忍不拔という問題である。この準備はおそらく「触れる」ための準備ともなるはずであるが、ゲーテのいう「準備」が手軽なものでないことは確かであろう。なぜならそれは、相手（世界）が触れる、触れてくるほどに真摯な長い時間をかけた準備と、そこから生れる価値のある成果が前提となるからである。いや、世界中から瞬時に情報の届く時代にあつて、じつとしていても異国の情報が押し寄せてくるとすれば、そのためのためにじっくりと準備を整える余裕すらないというのが現状かもしれない。だとすれば事態はなおさら深刻であつて、準備はますます真剣にこれを行わねばならないであろう。

世界に触れるための準備も、世界に触れられるときのための準備も、本来はまことに地道な努力を必要とする。わたくしたちはその努力がいつの日にか開花するのをじつと待たねばならない。また、その忍耐を引き受ける勇気というものも必要であろう。

ところで、わたくしはゲーテの作品のすべてに感動したというわけではない。なか

には退屈でももしろくないものもあり、ゲーテともあるうものがなにゆえこのような駄作をものするのかと、さながら天使にも比せられるべき恋人の？にあばたを見つけて落胆する少年ごとく不満に思ったものだったが、相手を受けとめるだけの、たくましく、かつ繊細な感性も、粘り強い思考も、まだまだ未熟だった高校生の片恋なれば、まことに無理からぬことであつた。

ただ、退屈でももしろくないと感じて途中で投げ出した作品であるのに、すぐにまたそれが読みたくなるのもゲーテの不思議なところである。長編『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』などもその一つで、どこがおもしろいのだろうかと首をかじげながら、何度も読み返してなお退屈、それでもまた読みたくなるのは、どうにも説明がつかなかった。

たとえば作品の冒頭、主人公が自分の生い立ちを恋人に語って聞かせる場面が延々と続く。ゲーテ研究者にとつてこの箇所はまことにうれしい自己証言のだが、小説の読者としてはいささか辟易する。その証に、恋人のマリアーネでさえ話の途中であくびをかみ殺している。恋人にしてこのありさまなのだから、赤の他人である読者ならもっと退屈してもおかしくはない。事実わたくしもその一人であつた。

が、退屈する話を取るに足らないのかというと、そんなことはない。たしかにゲーテは読者へのサーヴィスなどしない。他方作者の伝えたいことを真剣に受けとめようと努めるかどうかは、読者の器量と敬意の問題であろう。ゲーテはこの長編を書くのに、別の長編をまるごと一つ反故にするくらいに準備をしたのである。ゲーテが自己アピールに不得手だからといって、それがどれほどの過失であろうか。実をいうと、大学の講義として事情は同じである。多少の瑕疵をあげつらつてみても、受講生がそれでかしくなるかという点、そんなことはない。教師の側もまずもって本質と取り組まねば、学生にほんとうに価値のあるメッセージを伝えることはできない。

一見して、世界に触れ、世界に触れられることに慣れたあげく、孜々として取り組まねばならない「準備」という本質をないがしろにしてはいないか。返す刀で見映えをたてまつり、手軽に見映えをつくらうすべを習得することにかまけてはいないか。

優秀な同僚諸氏の目ざましい活躍ぶり、生気あふれる自由闊達な学生諸君の活動とをうれしくたのもしく感じながら、大学と学部との将来を憂える毎日でもあるのは、わたくしの思い過ぎのせいにはすぎないの